
NPO法日本海洋深層水協会メールマガジン 第82号 (2015年5月31日)

NPO法人日本海洋深層水協会 メールマガ編集チーム

当協会では、海洋深層水利用の最新動向や、各地のイベント、製品開発などの話題を、会員および一般の皆様へ、より積極的にお知らせするために、メールマガジンを発行しています。どなたでもご利用いただけますので、配信をご希望の方は、当協会HPの“メールマガジンの申込み”

http://www.npojadowa.net/DWScript/DWInfo_MailMgzn.htm

からお申し込みください。

なお、昨年10月から非会員の方には3か月に1回の配信となっています。

会員向けには、同時に海洋深層水関連ニュースも配信しています。

読者の皆様で、メルマガやHPを通じて情報や話題を提供したいと思われる方は、メールで npojadowa@npojadowa.net まで、ご連絡ください。

目次 <協会制作記事>

海洋深層水による海ぶどうとクルマエビの生産

最近の海洋深層水に関する話題では、沖縄県海洋深層水研究所を舞台とした海洋温度差発電(OTEC)実証の話が、たびたび新聞紙上を賑わせています。

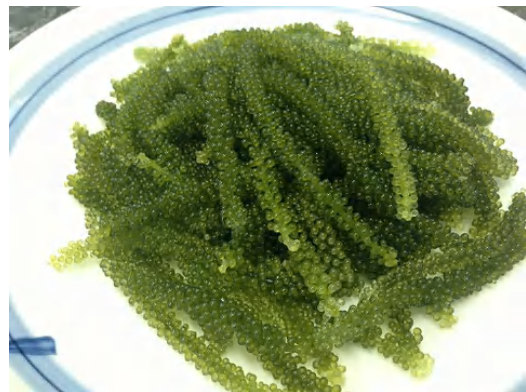
しかし、沖縄県では海洋深層水の水産利用の面でも大きな成果を上げており、これらの話題についても新聞に取り上げられています。

今回のメルマガでは、最近、日刊水産経済新聞に相次いで掲載された“海ぶどう”と“クルマエビ”の話題を、ご紹介します。

先ず“海ぶどう”ですが、JF 恩納村漁協が平成4年に陸上水槽で養殖を開始して以来、国内外から訪れる観光客の増加や本土出荷による需要の拡大で消費量が年々増加し、いまでは県下全域に養殖生産が拡大し、今年はおよそ300トンの生産が見込まれています。



海ぶどうの水槽養殖施設



海ぶどう

年間を通して陸上施設で養殖される海ぶどうは、天候によって大きく左右されるモズク養殖に比べて生産が安定していますが、海水温が 30℃を超えると粒の付が悪くなります。

このため、観光客の増える夏に収量が落ち、収量が増える冬には観光客が減るなど、需給ギャップが大きく、また、消費期限も常温で 1 週間程度と広域への流通に乗りにくいことが悩みとなっています。

このため、業界では数年前から高温水に強い天然種苗の導入を進め、夏場と冬場で種苗を使い分けるなどの工夫により、毎年、収量の増加につなげています。また、流通に当たっては、夏場の本土出荷は問題が無いものの、冬場に気温が低いと粒がしぼむため、新聞でくるんで使い捨てカイロで温めて発送するなど、冬場の広域出荷の技術が開発されています。

業界では平成 22 年に、海ぶどう養殖の適正化と品質向上などを目的に「沖縄県海ぶどう生産者協会（139 会員）」を設立し、県産海ぶどうのブランド化に向け、安全・安心で高品質の海ぶどうの生産に努めています。

こうした中、業界では清浄な海洋深層水で養殖に取り組む地元大手と小規模業者の二極化が進行しており、また、業者の多くが独自の販売ルートを持っていることから、生産者が一丸となった活動が停滞気味で、今後、協会活動の再構築に取り組むことにしているとのことです。

次に、“クルマエビ” です。沖縄県の久米島では 4 つの養殖事業者が年間 200 トン程度のクルマエビを生産していて、全国の生産量の 15%強のシェアを占めています。

久米島の養殖クルマエビの特徴は水深 612m からくみ上げた海洋深層水を使い、急性ウイルス血症 (PAV) に感染していない親エビを育成し、抗生物質や抗菌剤などを一切使わずにウイルスフリーの稚エビを育てていることです。種苗生産時に海洋深層水を使用している養殖場は久米島以外にはなく、沖縄県海洋深層水研究所で開発された健苗育成技術を、沖縄県車海老漁業協同組合に技術移転して、平成 15 年度から養殖用クルマエビの種苗供給事業を開始しています。



クルマエビの養殖池



クルマエビ

久米島の4つの養殖事業者は、この健康な稚エビを購入し、屋外の大きな養殖池で商品サイズまで育てて出荷しています。養殖池の環境は、クルマエビの飼育の間に海水中に溶け込んだ排泄物などが自然に無害化できるように、微生物、植物プランクトン、動物プランクトンなどが連鎖した生態系（エコシステム）を形成するようにしています。

また、エビの体調管理には細心の注意を払い、毎日潜水観察で健康状態を把握し、排泄物や残餌が溜まる池の底は潜水清掃で徹底的にクリーンにして病気が発生しないように努めており、また、万が一、エビの調子が悪いときには池の換水量を増やしたり、餌の量を調節することでエビ自身が自然に体力を回復させるように管理しているとのこと。

久米島は温暖で良質な海水を使える環境のもと、エビの成長が早く、歩留まりも高く、安定的な大量生産が可能であり、引き続き、抗生物質や抗菌剤を一切使用しない安全・安心で高品質なクルマエビづくりに努めていくとのこと。

今回のメルマガでは、日刊水産経済新聞の記事（海ぶどう：2015年4月16日号、クルマエビ：2015年5月19日号）を参考にさせていただきました。

(Nio)